

J.S.Bach Sinfonien

バッハ シンフォニア

第9番 ヘ短調 BWV795

- 楽曲分析と演奏法 -

著者：市花 真弓

目次

はじめに、インヴェンションとシンフォニアについて	3
1. バッハ「シンフォニア」第9番 f moll BWV 795 楽譜	4
2. 対主題とラメント・バスと装飾記号の演奏について	6
3. バッハ「シンフォニア」第9番 f moll BWV 795 第I展開部の楽曲分析と演奏法について	7
4. バッハ「シンフォニア」第9番 f moll BWV 795 第II展開部の楽曲分析と演奏法について	10
5. バッハ「シンフォニア」第9番 f moll BWV 795 第III展開部の楽曲分析と演奏法について	12
6. バッハ「シンフォニア」第9番 f moll BWV 795 第IV展開部の楽曲分析と演奏法について	14
7. 楽譜にアナリーゼの内容を表記しました。 テンポ、強弱も記しました。	16

■はじめに

2003年度からメールマガジンの配信システムを利用しました音楽講座としまして、「バッハ インヴェンションを弾いてみよう！- 楽曲分析と演奏法 -」の発行を始め、2012年にPDF書籍版に移行致しました。思いがけず、多くの皆様にご利用頂き、パソコンの前で頭が下がる思いであります。

2019年3月～2020年5月、バッハ インヴェンション全15曲の全面作り直しを致しましたが、シンフォニアも同様に全面作り直しをする事と致しました。作る度に新たな発見などあり、このように音楽に向き合っている今に感謝しております。(2020年6月)

■インヴェンションとシンフォニアについて

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685-1750) のクラヴィーア曲は、その大部分がケーテンの宮廷楽長時代 (1717~1723) に書かれました。インヴェンションとシンフォニア BWV 772-801 (*Inventionen und Sinfonien* BWV 772-801) も、「フランス組曲」「イギリス組曲」「平均律クラヴィーア曲集第1巻」などと共にケーテン時代に書かれた作品の一つとなります。クラヴィーア曲の多くは、教育目的として書かれました。バッハには、自身が「いずれも生まれながらの音楽家」と誇らしく語る息子たちがおり、とりわけ豊かな才能に恵まれていた長男ヴィルヘルム・フリーデマンの教材として「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集 (*Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach*)」(1720年頃) が編まれました。この曲集の中に「インヴェンション」の最初の形が見出される事となります。そこでは、2声の曲が「プレアンプルム」(*Praeambulum*)、3声の曲が「ファンタジア」(*Fantasia*)と題されていました。その後、バッハはさらに改訂し、1723年に配列も変え、題名も2声曲を「インヴェンツィオ」、3声曲を「シンフォニーア」と改めました。

自筆浄書譜には次のような表題があります。

「クラヴィーアの愛好家、とりわけ学習希望者が、まず2声部をきれいに弾き分けるだけでなく、さらに上達したならば、オブリガートの3声部を正しくそして上手に処理し、それと同時に、すぐれた楽想を得るだけでなく、それらを巧みに展開すること。そしてとりわけ、カンタービレの奏法を身につけ、それとともに作曲の予備知識を得るための、はっきりした方法を示す正しい手引き。」

シンフォニアもインヴェンション同様に、曲集に採用されています 15 調は、ハ長調 - ハ短調 - ニ長調 - ニ短調 - 変ホ長調 - ホ長調 - ホ短調 - ヘ長調 - ヘ短調 - ト長調 - ト短調 - イ長調 - イ短調 - 変ロ長調 - ロ短調 と 嬰ヘ短調、嬰ハ短調、変イ長調を除く 15 調が上行形に整えられています。(シャープ、フラット4つまでの調です。)

Sinfonia 9

Johann Sebastian Bach
BWV 795

The musical score for Sinfonia 9, BWV 795 by Johann Sebastian Bach, is presented in five systems. Each system consists of a treble and bass staff joined by a brace. The key signature is G major (one sharp) and the time signature is 3/4. The score is heavily annotated with fingerings (numbers 1-5) and articulations (accents, slurs, and breath marks). The first system begins with a treble staff containing a series of eighth and sixteenth notes, and a bass staff with a simple accompaniment. The second system introduces more complex rhythmic patterns and fingerings. The third system features a prominent sixteenth-note passage in the treble. The fourth system continues with intricate melodic lines and fingerings. The fifth system concludes the piece with a final cadence and a fermata over the final notes.

2. 対主題とラメント・バスと装飾記号の演奏について

深い悲しみと厳粛な表現豊かな曲です。2つの対主題とラメント・バスの3つの主題が常に一緒に現れる3重フーガの曲と言えます。

対主題Iです。



2小節の対主題Iの半分は、ため息の動機aの繰り返しとなっています。なお、動機aのスラーはオリジナルです。(対主題IIのスラーもオリジナルです。)

対主題IIです。



冒頭は休止ですが、3小節以降は常に対主題Iと共に現れます。対主題Iの変奏と見られます。

ラメント・バス (Lamento bass) です。



ラメント・バスは、「嘆きのバス」とも言われ、バロック時代の音楽家が悲しみを表現する際によく用いた手法です。始まりの音から半音ずつ完全4度下まで下降し、オクターブ下の音までジャンプします。ここでは、第5音まで順次下降し、後尾はカデンツとして終結しています。

この曲の装飾記号は、12小節上声第4拍目のG音上の $\blacklozenge\blacklozenge$ (Pralltriller) のみとなります。



と演奏して下さい。